

## 『文化と英語教育』

— 文化、思考、言語 —

森山宏美\*

“Culture and TEFL in Japan”

— Cultures, Ways of thinking, and Languages —

Hiromi MORIYAMA

## 要旨

全ての文化は、人々がその構成員のために互いに体験を解釈し、伝えることができるという方法で“言葉の世界”というものを創り出そうと試みる。

もし異なる文化に属する二人が出会ったとすると、そのコミュニケーションが、フラストレーションを生じるか、憎悪にまで及ぶ場合もあるかもしれない。

近年では、あちこちでさまざまな人種の人々が見かけられる。他方、わが日本の社会が経済、文化、政治など、あらゆる面で世界の他の国々と同様、大いなる変貌を遂げつつある。

外国語教育も同様に深刻な状況に直面しているけれども、筆者は、ここに「文化」や「思考」を完全に体得することの必要性を強調したいと考えている。そして、筆者は外国の文化背景の知識と語学の知識を基礎にして、彼ら異文化の人々と暮らし、語り、彼らと喜怒哀楽を分かち合うことで、真の異文化理解が始まりそれらによって始めて外国語教育が始まると考える。実際“言葉”を学ぶことは文化を学ぶことである。

## I. はじめに

すべての文化は、人々が体験を解釈して、相手に伝えることができるという方法、すなわち、“universe of discourse”<sup>(1)</sup>を創り上げようとする。この“universe of discourse”は、文化的遺産の最も貴重なものの一つであるが、それは、一部は意識的に、一部は無意識的に、世代を経て伝達されるものである。親や、教師は、服装、思考、ジェスチャー、他人の行動に対する反応などを褒めたり批判したり、はっきり口に出して教育を授ける。言葉を学ぶ者を取り巻くさまざまな人は、それぞれ男性として、あるいは女性として、母親として、父親として、店員として、巡査として、一貫した振舞いをしており、そうした一貫性のある行為を通して、

何が適切な行動かを示している。

そのようにして、どの文化でも、その文化圏内の法則は、その大半が無意識のうちに伝達され、受容される。<sup>(2)</sup> 例えば、店員が客が尋ねているのに、返事もしない、あるいは無愛想だ、この品を包んでくれといっても粗末な包装紙でくるんで平然としている。美しくきっちりと包もうともしない——といった状況は、日本人にとっては、まさに不愉快極まりないものと感じる。しかし、それが、気にもならない、当たりまえと受け取る人種もこの地球上には多いわけである。

このように、心理的にも、身体的にも、異なる文化に育った人々が対面する時は、文化に、あるいは観念に由来する物の見方や、コミュニケーションの仕方の違いが、互いを理解しようとする努力を妨げる可能性を孕んでいる。こういった異文化同士の出会いから生ずる危機に、大抵の場合、本人が知らぬうちに不安、不信、そして自分自身でも全く気がつかない誤解と憎悪までも相手に与えてしまう危険性すらあるとも言えよう。そして、互いが、自分は全く理に適っていて、正直で思慮深く行動しているのに、相手はどういったことだろう！ と、自分の正当性を信じて止まないのである。<sup>(3)</sup>

以上のように、さまざまな誤解を生む例として、Barnlundは、日米の比較を我々に示している。いろいろな見解もあると思われるが、ひとつの例として参考になるようである。<sup>(4)</sup>

## II. 異文化を知る

そもそも、文化とは何か？ 学問的領域が違えば、おのおのの定義や考え方が違うこともあるだろう。例えば、英国の人類学者Tylorは、

「文化とは、知識、信仰、道徳、法律、慣習、その他、およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習性のそれらの複合的全体である。」<sup>(5)</sup>

と定義している。

仮に、この定義に従うとすると、文化化(enculturation)とは、特定の社会に生まれ育つ個人が、その社会の文化を習得してゆくプロセスで、「特定の言語および非言語行為を媒介して、特定の行動の型を、個人の内部に体制化していくこと」<sup>(6)</sup>であり、それこそ

「食事作法や排泄、清潔保持の仕方や就寝のしかたなどの基礎的な、生理的、社会的慣習の形成に始まって、その社会の言語の習得、その社会が伝統的に伝えてきた環境や技術、伝統的な知恵と知識を、適切に使用する能力の獲得、有言、無言の人間関係の了解、顔の表情や、身ぶり、その他の動作による感情表現や伝達の方法やきまりの習得に至るまで、個人が、社会の構成員として、さまざまな役割を演じてゆく上で必要な諸技術、諸観念の全てを含む学習、習得が、教授される過程である。」<sup>(7)</sup>と考えられよう。

映像を通して、また街中で、日本人と見間違えるような人間が、外国語を捲くし立てる情景に出くわす事も多くなった。彼らに共通して言えることは、一つの基礎的文化のどこかの過程で、異文化にどっぷり浸る体験を、しかも、長期にわたって通過してきているという点である。アン・村瀬氏は、

「…マルチカルチャー人間になるためには、外国へ行って生活してこなればだめかという、私はそうは思いません。これだけ情報手段が発達し、情報量も多い現在では、居ながらにして多くの異文化の知識を得ることができます。…」<sup>(8)</sup>

と、筆者とは正反対の考えを述べておられる。しかし、これはどうだろうか。例えば、筆者が、10年、20年…と学び続けた英語でシュチュエーションとコンテキストに合った談話に成功していると確信をもってコミュニケーションできるのは、日常生活全体の何パーセントであらう

うか。筆者の恩師、故イレーン教授<sup>(9)</sup>に、「お世辞を言われたら、どう答えばよいのですか？」とお尋ねしたことがあった。先生は、しばらく考えて、「“Thank you for the compliment.”とおっしゃい。」と、にっこりと微笑を浮かべて答えられたのを記憶している。欧米人は、ほめられるのが好きだが、心からのものでなければ、不快感をあらわす。<sup>(10)</sup>

たてえ一つの文化化が、スムーズに行なわれたとしても、もう一つのまた別の文化化・文化吸収(=異文化習得)がうまく行なわれるか否かは、そう画一的に予想されるものではないと考えられる。やはり、アン・村瀬氏の考え方には、少し無理があるように思えるが、どうであろうか。

異文化を知ることは、並大抵のことではない。過日に起こった日本人留学生の誤認銃殺事件も、日本人にとっても、アメリカ人にとっても、記憶に深く刻まれるものであった。そして、その加害者に対する判決も、日本人にとっては、慎重に判断すべきものであったのではなかろうか。

異文化を知ろうとする時、それは時として、喜怒哀楽を超える「生・死」を賭けるものであるという覚悟も含まれていることを、あの事件は、我々に警告している。

その一方で、異文化を知るといことは、大きな感動と喜びを与えるものであることも、おわせて付記しておかなければならない。

この章の最初に定義を掲げたように文化とは「…知識、信仰、道徳、法律、習慣、その他、およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習性の、それらの複合的全体…」<sup>(11)</sup>であり、その文化を有している一つ一つの民族・集団は、その文化に属する構成員のもの考え方・価値観を、そしてそれらは、全ての事柄や現象に対する反応、判断などあらゆる個人の思考を規定し、その思考の型に従って、言語使用の形式とその機能を規定すると考えられる。

本試論において再度、後述するが、この文化、思考、言語が、全て体得されて始めて、異文化が体得できたと言えるのではないだろうか。逆に言うと、英語教育に限らず、言語を習得すると言う時、「言い表わし方」と「受け止め方」の背後に存在するその対象民族、対象とする集団の文化と思考の型を体得し、十分に了解された時、初めて、言語使用は、適切なcreativityを発揮すると考えられる。

従って、先程引用した『人間と文化』に於ける、アン・村瀬氏の判断<sup>(12)</sup>には、いずれにしても賛成できないように思われる。

「異文化を知る」—— この大きなテーマを克服するには、大いなる覚悟と忍耐そして果敢さと引き替えに人間として“価値観”、かってない“個”の内面的拮抗りを勝ち取ることが、可能であろうと確信する。

### Ⅲ. 日本の英語教育の現状

平成元年に改訂された、新高等学校学習指導要領は、

「オーラル・コミュニケーションA」(日常会話)

「オーラル・コミュニケーションB」(リスニング)

「オーラル・コミュニケーションC」(討論)

と、口頭によるコミュニケーションを重視したコースを三科目設け、そのうち少なくとも、一科目の履修を事実上義務づけることにした。<sup>(13)</sup>

旧学習指導要領では、オーラル・コミュニケーション関係科目では、「英語ⅡA」(リスニング・スピーキング)ただ一つで、しかも、それが殆ど履修されず、古典的訳読法を中心とする学習で占められてことを思うと、画期的改革の第一歩と言えるのかもしれない。

今回の改善の主旨を見てみると、

「外国語においては、中・高等学校を通して国際化の進展に対応して、コミュニケーション能力の向上のため、聞くこと、話すことを一層重視することとした。また、教材選定の観点を示す中で国際理解を深め、国際協調の精神が養われるよう配慮した。」<sup>(14)</sup>とある。

一方、社会全体に目を転じてみると、産業界のグローバル化を狙ったさまざまな分野からの、強い圧力や批判もあり、ようやくその影響を受け、英語教育の在り方を根本から変革しようという動きも強まり始めている。

例えば、『創造的革新の時代』と題する著作の中で、

「産業界のそのようなグローバル化が進んでいくと、外国企業との間においても、それぞれの強みを生かした合併や、共同研究開発、技術協力、などのさまざまな企業間連携や企業間協力が一層進んでいくことが予想される。また、研究開発も、業際的な研究の増加を背景に、一つの主体が、独立閉鎖的に研究開発を行なうことは困難となってきており…世界各地の拠点の研究開発成果を見ながら国際的に最も優れたものを生かしてゆくことになる。特にリスクとコストの大きい研究開発については、国際的な連携の下における共同研究開発が進められることになる。」<sup>(15)</sup>

と述べられている。将来、こういった企業の躍進を支える構成員として、今の若者たちが、十分に使命を果す為には、日本人としてのアイデンティティを失うことなく、活躍の場を見出してゆくことは、極めて重要な目標の一つとなろう。その目標を現実のものとするための英語教育革新が、今求められているのではなかろうか。

そのためには、

- (1)教授者たちに今、何ができるか。
- (2)どんな学習者達を指導対象にしているのか。
- (3)社会の動きに対応しているか。

この3点を明確に捉えておくことが必要であろう。

上に掲げたように、先ず第1に、教授者に今、何ができるかということである。

筆者を含む教員が、

- (1)英語教師として、コミュニケーション能力に乏しい。
- (2)異文化体験に乏しい。
- (3)授業展開の腕力に乏しい。

ことを認め、改善に努力しなければならないと思う。<sup>(16)</sup>

その一方で、

- (1)語学力が比較的豊かである。
- (2)学問的文化背景の知識が、比較的豊かである。
- (3)英語学を含む、学問的な英語の知識が比較的豊かである。

といった点をフルに生かし、より魅力的な、しかも深みのある英語教育のプロを目指して努力することが、何よりも望まれるのではないだろうか。

さて、目下英語のコミュニケーション学習を工夫してみようという提案・実践<sup>(17)</sup>、また、AET (Assistant English Teacher) と共に、授業を工夫する提案等、一部では活発に、英語学習の実践に取り組もうという動きが、教授者の中にも始動し始めている。また、L.L. (Language Laboratory) だけでなくCAI (Computer Assisted Instruction) の研究<sup>(18)</sup>も進んでいる。

第2に、どんな学習者達を、指導対象にしているかという点である。

筆者が、1986年にまとめた学習者の意識<sup>(10)</sup>は、随分、様相を変えてきていることが今回の調査<sup>(20)</sup>で分かってきた。この調査の被験者の学生達は、

- (1)「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」といった4技能のバランスに対する健全な認識を持ち始めていること。
- (2)外国人一辺倒のペラペラ指向に、強い疑問を持ち始めていること。
- (3)ただ、「話す」ことへの執着を経て、話す内容を持つことの重要性に、気が始めていること。

などが、明らかとなった。また、英語をマスターするために、苦痛がともなうのは当然だといった考え方が、次第に広がりつつある。

第3は、社会の動きに対応しているかである。ここでは、くどくどと陳述しないが、やはり、我々英語教育に携わる者も、社会の情勢や動向に敏感に反応し、対応すべきではないだろうか。

以上のことを述べておいて、再び、次章で本筋である、文化と英語教育というテーマに戻りたい。

#### IV. 異文化を知ることと英語を学ぶということ

第Ⅱ章では「文化とは何か?」、そして「文化化の中での異文化を知る」ということを考えてきた。

第Ⅲ章では、英語教育の現状と、英語を学ぶことの重要性について考察してきた。

では、英語教育のより高いレベルの在り方、指導方略の足掛りを見出す為に、この両者(=異文化を知ることと、英語を学ぶということ)の接点を見出すことを試みたいと思う。

先ず、日本の文化を赤裸々に述べているR.C. Christopherの言葉に耳を傾けてみたい。

..The Japanese language is so complex that it has been called "the Devil's language." Since the Japanese as a people distrust and shun straightforward verbal communication, this suits them just fine. ...

.....

..Racially and culturally, Japan is the most homogeneous of the world's major nations — which is a prime reason Japanese have been able to Westernize their society yet still preserve a keen sense of their own special identity. ...

.....

..Though Japanese rarely admit it, their society is an exclusionary one. The only way to win complete acceptance by Japanese is to be born into their tribe. ...

.....

..Japanese abhor direct personal confrontation and, to avoid it, almost always operate by consensus. Though often a handicap, this is also a source of strength. ...

..... (21)

以上は、アメリカ人の眼を通して見た日本人、あるいは、日本文化の特徴のいくつかであり、正に穿っているように思う。

更にもっと、日本文化とアメリカ文化の比較、日本人とアメリカ人の特徴を浮き彫りにした Barnlundの分析を次の表で見よう。

Fig.(1) Japanese Cultural Profiles (2.2)

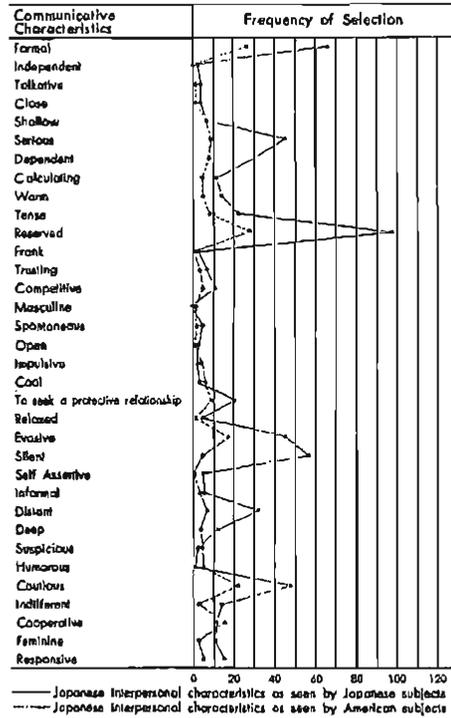
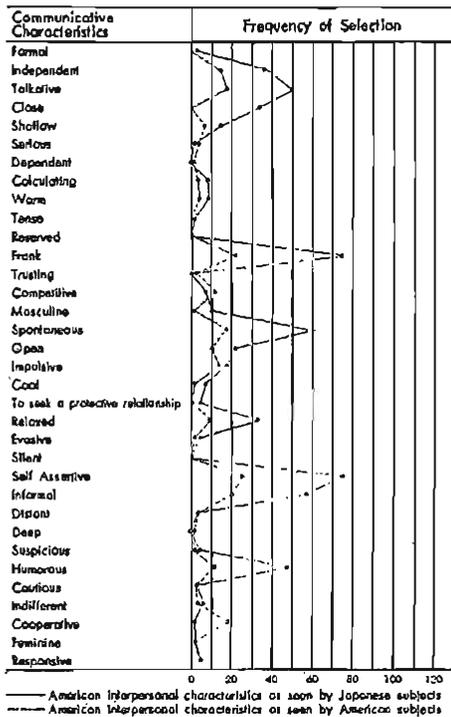
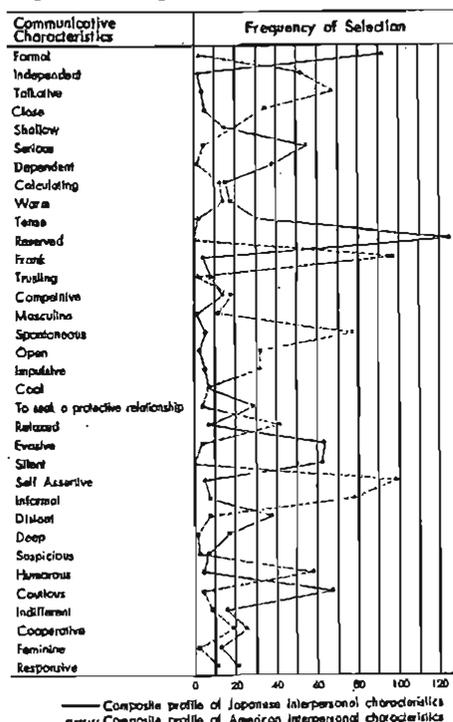


Fig.(2) American Cultural Profile (2.8)



意志疎通の特徴をそれぞれ、日本人の場合、アメリカ人の場合、そしてそれだけでなく両者を重ねあわせて比較して見えている (Fig.(1)~(3)) 言葉だけの学習が、如何にロスの多い、実の少ないものであるかが、よく分かる。例えば

Fig.(3) Composite Cultural Profile<sup>(24)</sup>



お互い、日本人とアメリカ人の先入観が、出来上がってしまっている。この状態でコミュニケーションを続ければ、結果は火を見るよりも明らかである。日本人は、アメリカ人を他人の心の中までも土足で入り込むような人々だと感じ、アメリカ人は、日本人を遠慮ばかりで、いつまで経っても心を開かない不可解な人々だと奇立ちを覚えるであろう。実に興味深いデータである。

次に、英語学習の面にも、目を向けてみよう。先に述べた英語教育の現状、そしてその中でも、特に社会的状況をもう少し詳しく掘んでみたい。

戦後の世界を支えてきた秩序は、大きく変貌を遂げ、新しい枠組みへの胎動が始まっている。例えば、

- (1) 経済システムの面では、米国経済の相対的地位の低下に伴い、国際経済秩序の動揺が見られる。
- (2) 産業・技術の面では、現在進行中の技術革新の波が、新産業革命をもたらし、これが世界の経済社会を新しい次元に導きつつある。
- (3) 一方、経済活動のグローバル化 (globalization) の中で、国境の持つ意味が変質し、経済社会の対外開放による経済合理性の追求と国家の枠組みの下での社会的インテレスト (interest) の確保を如何に調和させるかが、極めて難しい問題となっている。
- (4) 政治・軍事の面では、米ソ関係の急進展により、戦後の国際政治の枠組みは大きく変容しつつあり、国力を支えるものとして経済・技術の役割が極めて大きくなってきている。

(25)

といった点である。

このような世界秩序の変容の中で、日本自身も、次のような歴史的転換点にさしかかっている。

- (1)日本は、一人当たりGDPで主要先進国を抜き、また、世界最大の債権国となる等、国際的には大国化の現実に直面して責任ある対応を迫られている。
- (2)日本を巡る対外摩擦も、生活スタイルや文化の相違に根ざした制度の摩擦など、日本社会のあり方に関わる根源的な問題に及びつつある。
- (3)このような中で、日本社会は内からも外からも独自の新しい産業・生活・文化スタイル（価値観と様式）の創造を求められている。

国民の欲求は物質的な面での充実を超えて、心の豊かさ、高い精神的価値を求めるようになってきており、既に混沌の中にも、新しい価値観と様式を求めて着実な変化が始まっている。…<sup>(28)</sup>

このような日本情勢の中で、先述の“英語改革”の目標構築と実践を行なうことは、正に、時宜を得た判断であると思われる。

さて、それでは、この異文化をすることの難しさと、日本のこれからの英語教育の改革との接点を見出し、何らかの契りを得たいと思う。

筆者は、大きく分けて、4つの点を指摘したいと考えている。

- (1)異文化を知ることと、英語（外国語）を学ぶということは、日本人がこれから何が起るかもしれない情勢の中で生き抜くためのあらゆる判断の可能性を拓ける源であるということ。
- (2)異文化を知ることと、英語を学ぶということは、日本人が、未来の進路を選択してゆく際の、あるいは創造してゆく際の、多角的思考のベースとなる。
- (3)異文化を知ることと、英語を学ぶということが、他人の痛みを理解できる人間となるということ。
- (4)異文化を知ることと、英語を学ぶということは、未知の知、人間と人間の出会いの感動・喜び・自信など情意投合を体験できるということ。

である。

このように見ても、語学教育は、正に文化教育そのものであるとも言えよう。

ここに、“言葉”を習得することは、深く底辺（＝文化）の中に、どっぷりと浸って、ものの考え方、習慣、さまざまな事柄に対する反応・判断などが驚きや発見を通して体得されなければ、真の「学び」とはなり得ないことを協調して、筆者のこれからの言葉の学習への警鐘としたい。

## V. おわりに

戦後世界を支えてきた秩序は、現在、経済・政治・軍事等、諸領域において、大きな変貌を遂げつつあり、これに代わる新しい秩序を模索し始めている。<sup>(27)</sup>と考えられる。

これまで考察してきた、社会・人間・文化の変貌をも観察する中で、外国語教育も、その真の在り方を創造することが、時宜を得た課題であることを確認した。

「言語」を規定する「思考」、その「思考」を規定する「文化」——という認識が、今後の外国語習得のカギであると共に、外国語教育は文化教育そのものであるという結論に辿り着いた。

本試論が、日本人による日本人のための磐石のごとき確固たる指導の在り方を見出してゆく問題提起の第1歩となること願って止まない。

〔註〕

- 1) D.C. Barnlund, *Public and Private Self in Japan and the United States* (東京：The Simul Press, 1982) P.17.
- 2) *Ibid.*, PP.17-18.
- 3) *Ibid.*, P.23.
- 4) 下記の表は、上記 Barnlund の分析を筆者が表にまとめたものである。

異文化間のコミュニケーション（日米の比較）

◇意思疎通形式の一般的傾向

日本式意思疎通形式の傾向	アメリカ式的意思疎通形式の傾向
1. コミュニケーションの対象	
少数の者と選択的に接する。自己露出の限度を心得ており、予測できない未知の人と出会う時公的自己の枠をはみ出す危険性が大きい。	日本人に比して選択性低くより多くの人と無差別に接する。未知の人ともそれほど話題を熟慮する必要もない。
2. コミュニケーションの形式	
コミュニケーションは自発的な形式より規則的・儀礼的なものに安定感を感じる。私的自己の露出を恐れできるだけささわりのない方法を用いる。	儀礼的なものにこだわっては、自己を十分に表現することの妨げになるので形式ばった方法は極めて好ましくない。
3. 会話の内容	
自己の内面的感情の表出や考え方にかかわる内容よりも、外観の出来事に無難な話題を求める。	個人的な意見をのべる方が会話には貴重であり、喜ばれる。内容に於ける公私の境界を日本人ほどこだわらない。
4. 非言語的手段によるコミュニケーション	
言語的表現に伴う身振りやしぐさ相手の肩等に触れる事は制限的でむしろなれなれしさとして不快感を与える。	言語的親密さと同時に身体的接触をコミュニケーションの一手段としてより頻繁に用いる。
5. コミュニケーションにおける自己防衛反応	
自分に好ましくない話題や質問、あるいは、不用意な内容に対し、間接的で遠隔的暗示をなす表現を使って否定・拒絶する。	検閲すべき内容がより少ない為感情を害したり防衛の必要性も少なく、否定・拒絶も明確で断定的。
6. 自己の表現による客観的自己認識	
自己を表現する機会も少なく、よって十分な自己認識や自分に対する客観的洞察に欠く。	常に自分を他人にアピールし、自己を伝える機会が多く、その意味においては自己の認識は豊かになる。但し、それ故の個人間の衝突も多い。
7. コミュニケーション形式の（期待される形式）獲得	
できるだけ慣習に従い、場所と役割を認識した謙虚で言葉少なさ、しかも公私をわきまえたコミュニケーションの形を期待される。	独創的、独立的で自らを堂々と主張する積極性を求め自発的コミュニケーションを期待する。

- 5) 梶野 命著『人間と文化』（東京：朝倉書店, 1982）P.3.
- 6) *Ibid.*, P.121.
- 7) *Ibid.*, PP.121-122.
- 8) アン・村瀬著『人間と文化』（東京：三愛新書, 1981）P.123.
- 9) 故イレーン・ボラード教授は、生前筆者が英語指導を受け、大変お世話になった先生であり、一貫して日本語は使わず、英語のみで授業された。英国御出身であった。
- 10) M. Englebort et al., 『日本の常識は世界の非常識』（東京：オーエス出版, 1993）P.19.
- 11) 星野, *op. cit.*, P.3.
- 12) 村瀬, *op. cit.*, P.123.
- 13) 大谷泰照著『英語教育 Vol.42 No.6』（東京：大修館, 1993）P.29.
- 14) 文部省編『我が国の文教施策』（東京：文部省, 1992）P.474.
- 15) 通商産業省編『創造的革新の時代』（東京：通商産業省, 1993）P.9.
- 16) 筆者は一つの夢として英語教育の産学協同を構想している。先ずは、教授者・教師の公的保証の下における海外での研究留学を実現させ、企業の協力に対しては、コミュニケーション能力、語学力共に実力を持った学生を社会に多量に輩出できるように、また、企業人材として役立つよう英語教育の立て直しを図ることが必要であると思われる。
- 17) 橋本 満弘他著『英語コミュニケーションの理論と実際』（東京：桐原書店, 1993）PP.1-2.
- 18) 枝澤 康代他著『はじめてのCAI —— よりよい英語教育を求めて ——』（京都：山口書店, 1992）PP.57-68.
- 19) 森山宏美著『英語教授法の世界的動向と我が国における最適な方法についての一考察』（東京：Annual Report of Kansai Kyoiku Gakkai No.11, 1987）PP.48-52. この調査は奈良大学1・2回生計347名の被験者を対象に意識調査を行なった結果である。
- 20) 森山宏美『英語教育の未来 —— 学習者の意識を中心に ——』第23回中部地区英語教育学会大会にて（1993年6月26日）発表。被験者は、奈良大学1・2回生計314名。1993年5月18日アンケート調査を行なった。
- 21) R.C. Christopher, *The Heart and Mind of Japan*（東京：朝日出版, 1987）PP.3-20.
- 22) Barnlund, *op. cit.*, P.51.
- 23) *Ibid.*, P.53.
- 24) *Ibid.*, P.56.
- 25) 通商産業省大臣官房編『日本の選択』（東京：通商産業調査会, 1987）P.1.

以下は、将来に向けての基本理念と施策をまとめたものである。(通商産業調査会による。)

## 「日本の選択」の基本骨格

現状認識	世界＝秩序の動揺と再編成へのうねり 1. 世界経済システムの動揺 2. 新産業革命の進行 3. 経済社会のグローバル化と国境の変質 4. 世界政治・軍事環境の変化	日本＝世界的転換期 1. 大國化と内外の不均衡 2. 摩擦の新局面 3. 社会の変容と新しい価値観の模索
基本理念	「ニューグローバリズム」＝新しい枠組みの提案 1. 経済・文化中心の自由かつオープンな国際システム 2. GATT=IMF体制の改革とこれを支えるサブシステムとしてのいくつかのオープンな国家関係の輪の形成、アジア・太平洋諸国の主体的参加の確保 3. 多様性に対して柔軟なルールの適用 4. 日本の開放＝輸入大國化と世界の不均衡是正への貢献	「新・産業文化国家」＝日本の進路の選択 1. 連携（リンケージ）システムによる安全保障 2. 経済・技術力の涵養と国際貢献 3. 新しい産業・生活・文化スタイル（創造型文化）の構築
具体的施策	(ニューグローバリズムの具体的展開) 1. 日米の経済・産業協力 セミマクロ・ミクロ政策協調、 日米産業の融合化等 2. アジア・太平洋の開発協力 3. 通貨安定による産業基盤整備 レファレンスゾーン等通貨安定への対応、円の国際化 4. 国際的資金還流の拡充 貿易保険の拡充等 5. 国境を越える企業活動への対応 多国籍企業管轄の国際ルールの形成、国際産業政策、企業活動の国際協調化 6. 日本社会の開放	(世界への貢献) 1. 「市場」の提供＝輸入大國化 2. 「資金」の提供＝援助、貿易、投資三位一体の経済協力 3. 「技術」の提供＝創造的知識センターとしての技術の開放と知的所有権の新ルールづくり (国内基盤の整備) 1. 内外の不均衡是正を目指す経済運営 2. 創造型システムへの制度の改革 3. 学術・基礎研究の拡充 研究開発投資を新しい社会資本として推進、自由で創造的な研究環境整備のための改革 4. 地域活性化

26) *Ibid.*, P.ii.

27) *Ibid.*, P.1.

## Summary

Every culture attempts to create a "universe of words" for its members, in which people can interpret their experience and convey it to one another.

If two people, both of whom belong to different cultures, meet, their communication may cause them frustrations, sometimes leading even to detestation.

In recent years, many kinds of foreigners can be seen here and there in Japan. On the other hand, our Japanese society, in various fields — economics, culture, politics, etc. — is now undergoing big changes as well as other countries in the world.

Though TEFL is equally confronting with grave situations, the present writer wants to emphasize the learners' needs to learn by experiencing completely both foreign cultures, and foreign ways of thinking. And the present writer considers TEFL really begins with the true

understanding of foreign cultures by living with people in their cultures, talking with them, and sharing joys and sorrows with them on the basis of our knowledge of foreign cultural backgrounds and our linguistic knowledge. Indeed, to learn a language is to learn a culture itself.